

# 魯詩攷

(未定遺稿)

島田鈞一

魯詩は漢書藝文志に

詩經二十八卷齊魯韓

魯故二十五卷

魯說二十八卷

の目が載つてゐる。漢書楚元王交の傳に據るに、元王が少き時、嘗て魯穆公・白生と俱に詩を浮丘伯に受け、浮丘伯が長安にあるに及び、元王は子の郢客を遣はし、申公と俱に浮丘伯に従つて業を卒へ、後に申公は詩傳を著はせしことを叙して、

文帝聞申公爲詩最精。以爲博士。元王好詩。諸子皆讀詩。申公始爲詩傳。號魯詩。

とある。公羊隱五年何休解詁・班固白虎通義・文選李善注に魯詩傳を引いてあれば、魯詩に傳があつた證である。漢書藝文志に載する所の詩經二十八卷齊魯韓は其の經文であつて、魯故二十五卷・魯說二十八卷は、漢書楚元王交傳に申公が著はしたと稱する詩傳であらう。此の詩傳こそ魯詩說の標準であつたのであるが、今は亡びて傳はらない。申公は魯の人で、魯に居て詩を以て人に教授したから、魯詩の名が起り、遂に此の詩派の學祖となつた。申公が詩を傳へた方法は、主として口説を以て之を授けた。漢書藝文志には

漢興。魯申公爲詩訓故。

と言ひ、申公が自ら竹帛に著はして、一部の成書となしたる如く記しあれども、門流の者が後に至つて申公の説を筆録したるを、申公に歸して、自著と爲したのである。其事は具さに拙稿漢代の學風（師法家法の條）に論ぜるを以て、今此には省に従ふ。

### 毛詩と荀子

魯詩の傳來に就いて之を陳ぶるに先ち、毛詩の偉來を考ふるに、陸璣の毛詩草木蟲魚疏に其傳來を叙し、

孔子刪詩授卜商。商爲之序。以授魯人曾申。申授魏人李克。克授魯人孟仲子。孟仲子授根牟子。根牟子授趙人荀卿。と、毛詩の傳來は、卜商より遞傳して荀卿に至つた系統を叙してある。又た陸德明の經典釋文叙錄にも、毛詩の傳來を叙し、

毛詩者出自毛公。河間獻王好之。徐整云。子夏授高行子。高行子授薛倉子。薛倉子授帛妙子。帛妙子授河間人大毛公。毛公爲詩故訓傳於家。以授趙人小毛公。小毛公爲河間獻王博士。以不在漢朝故。不列於學。一云。子夏傳曾申。申傳魏人李克。克傳魯人孟仲子。孟仲子傳根牟子。根牟子傳趙人孫卿子。孫卿子傳魯人大毛公。陳喬樞は括弧内の九字を竄入として刪つてある。とある。上の陸璣の草木蟲魚疏と此の陸德明の經典釋文叙錄の系統を圖に著はせば、

(一)、陸璣說 卜商—曾申—李克—孟仲子—根牟子—荀卿

(二)、徐整說 子夏—高行子—薛倉子—帛妙子—大毛公—小毛公

(三)、一云說 子夏—曾申—李克—孟仲子—根牟子—孫卿子—大毛公

陳喬樞の說に従へば大毛公の三字は刪ることになる。

以上三系統があるが、便宜上陸璣の説を第一と爲し、叙錄に引いた徐整の説を第二と爲し、一云といふ別説を第三と爲して此に區別する。此の三説とも、皆毛詩の傳來を敘し、殊に荀卿が毛詩系統の經を傳へたことを述べたものである。然るに陳喬樞は魯詩遺說攷に別に一説を立て、第一と第三とは同一の系統で、魯詩の系統に屬し、毛詩の傳來とは全然關係なく、從つて敘錄第三の末文に、「孫卿子傳魯人大毛公」とある一句は、他文の竄入として、之を削り去ることに

してゐる。陸璣も陸德明も皆毛詩の學源は荀卿より出づと爲し、殊に敍録の末文に「孫卿子傳魯人大毛公」と明言してゐるのに、陳喬樞は、第一と第三は魯詩の系統で其學源は荀子から出てゐるから、二派とも其の末に荀子が擧げてある。但し、末文に孫卿が魯人大毛公に授くといふは竄入であつて、此の派には大毛公は全く關係はないものとし、第二の徐整が擧げた系統は、尤も正しい毛詩の系統で、此の毛詩の系統には荀子は全然關係なしと考へて、

序録所記一云者。卽陸璣草木疏之說。陸德明意。似以徐整爲正。整亦吳太常卿。與陸璣同時先後者。璣以大毛公爲受自荀卿。於古傳無所徵證。而申公魯詩傳自浮丘伯。爲荀卿再傳弟子。具載於漢書。章章可攷。則陸璣所紀。子夏傳會申云云。當爲魯詩傳受源流。確然無疑。書缺有間。篇簡斷佚失次。後人遂以此節屬之毛詩耳。魯詩遺說攷

とある。此の陳喬樞の意見は、大要以下の如くである。序録に記してある一云(第三)は、卽ち陸璣草木疏(第一)の說と同一で、是は魯詩の系統である。陸德明の意は、徐整(第二)の說を正しい毛詩の系統としたのである。大毛公が荀卿から學を傳へられたといふことは、古書には徵證する所がない。而して魯詩の學祖たる申公は荀卿の再傳弟子たることは具さに漢書に載つてゐる云云と。此の主張は、要するに荀子は魯詩を傳へたが、魯詩の傳授には關係がないといふのであつて、全く陳喬樞獨創の說である。余を以て之を考ふれば、第一は毛詩の草木蟲魚疏の中にあれば、陸璣は之を以て毛詩の系統としたるに相違なく、又た經典釋文敍録に擧げたる二つの系統も、先づ初に毛詩の傳來を以て説き起し、次いで第二と第三の系統を敍したのであれば、陸德明も亦た之を毛詩の系統と爲したるに相違あらず、第三の末文「孫卿子傳魯人大毛公」は竄入にあらずして、反つて子夏より孫卿を経て毛公に至つた系統を確信したのである。陳喬樞が「孫卿子傳魯人大毛公」の一句を竄入と爲したるは、荀卿を毛詩の毛統より除き去り、強て荀卿を援いて魯詩の系統に入れたことは、自明のことであるから、之を略したのであらう。第二の系統は、帛妙子と大毛公の間に荀卿のあるべきを略し、第三の系統は、子夏より荀卿に至つた傳授の人を、尤も具さに敍したのである。第二の系統は、中間傳授の人が、

第一第三に比すれば、少しく異なるも、三系統とも毛詩の系統で、荀卿が其中間に介在して、前人の説を承けて之を後人に傳へたことは疑なし。故に陳喬樞の説は牽強附會で従ひ難い。併し實は毛詩の學が荀卿に淵源するのみならず、魯詩も亦た荀子より傳來しることは事實である。若し荀卿の系統を専ら毛詩か魯詩の一方に屬せしめんとするは均しく偏見たるを免れない。元來古今文若くは齊魯韓毛詩の別は、漢以後に起つた名稱であつて、韓魯毛詩は皆荀卿の學脈を承け傳授の久しき、時を経るに従ひ、各學派に別れ、相互の間に小異同が起つたに過ぎない。其關係は冰炭相容れざる程の懸隔ある譯でないから、荀卿の詩説を、毛詩派は之を毛詩の本づく所となし、韓魯派は之を韓魯詩の本づく所と爲したのである。學者が毛傳が荀子に本づくことを主張し、其例として挙ぐる所の者は、多くは零文碎義であつて、格段に毛詩が荀子に淵源することを首肯するに足る者は少ないが、其尤も顯著なる一例は、陳風東門之楊の毛傳に、

男女失時。不逮秋冬。

と秋冬を昏期と爲するは、荀子大略篇に

霜降逆女。冰泮殺止。

と言ふに一致す。是れ毛傳が荀子に出でたことに於て、動かすべからざる確證である。然し之とても毛傳が獨り荀子と一致するのみならず、周禮媒氏疏に引ける王肅聖證論に

韓詩傳曰。古者霜降迎女。冰泮殺止。

とあつて、韓詩の説は荀子と一致す。是れ韓詩も亦た荀子に出づる一證である。魯詩は仲春の月を以て、昏姻の月となす。其證は白虎通に

嫁娶必以春何。春者天地交通。萬物始生。陰陽交接之時也。荀云。士如歸妻。迨冰未泮。周官曰。仲春之月。令會男女。令男三十娶。女二十而嫁。夏小正曰。二月冠子娶婦之時也。嫁娶

と言ふ、白虎通は魯詩説なれば、魯詩は鄭玄が仲春を以て昏姻の月となすと合ひ、荀子韓詩毛詩と合はす、是に據りて

毛詩が荀子に本づけるを知るべきである。

### 魯詩と荀子

毛詩が荀子と一致することは、上述の如くなくとも、陳喬樞の説の如く、魯詩が荀子より出たといふ説も、確として根據あつて否定すべきでない。但魯詩と荀子と一致する例を挙げんとするに、魯詩は西晉の時に亡び、今は其全貌を見る能はず、僅に諸書に引用せる佚説と、魯詩系統に屬する書に就いて、其面目を髣髴するに過ぎざれども、荀子に行衛道者不至。事兩君者不容。目不兩視而明。耳不兩聽而聰。隤蛇無足而飛。梧窮五枝而窮。鴈鳩在桑。其子七兮。

淑人君子。其儀一兮。其儀一兮。心如結。故君子結於一也。荀子勸學

とある。之を魯詩の遺説に徴して對照すれば、

說苑。詩云尸鳩在桑。其子七兮。淑人君子。其儀一兮。傳曰。尸鳩之所以養七子者一心也。君子之所以理萬物者一儀也。以一儀理物天心也。五者不離。合而爲一。謂之天心。在我能因自深結其意於一。故一心可以事百君。百心不可以

事一君。說苑反質

列女傳。詩云。尸鳩在桑。其子七兮。淑人君子。其儀一兮。心如結兮。言心之均一也。尸鳩以一心養七子。

君子以一儀食萬物。一心可以事百官。百心不可以事一君。此之謂也。列女傳一

とある。說苑及び列女傳を著した劉向は、楚元王交の子休侯富の曾孫である。元王は詩を好み、王の子鄧客は、魯詩の學祖たる申公と俱に浮丘伯に事へ、浮丘伯は荀卿の門人であるから、元王の裔孫たる劉向は、其家學を繼いだ、其學統の上から考へて上に擧げたる說苑に引く所の傳は、申公の詩傳であるから、魯詩の學を攻めたるは推知すべきである。故に劉向が其說苑列女傳に鴈鳩の詩を引くに能く荀子と一致し、殊に曹風鴈鳩の毛詩序には「鴈鳩刺不壹也。在位無君子。用心之不壹也。」とあつて、不壹なるを刺つた刺詩としたるに、荀子には譏刺の意なく、又た說苑に「結其意於一」と言ふは、荀子の「結於一」と合ひ、「百心不可事一君」と言ふは、荀子の「事兩君者不容」と合ひ、列女傳に「言心之

均一」と言ひ、「百心不可以事一君」と言ふも、能く荀子と合ふ。殊に之を以て考ふれば毛傳は鴈鳩の詩を不壹を刺つた刺詩と爲したるに、荀子に譏刺の詩なきは、毛傳は荀子に合はずして、反つて說苑及び列女傳が荀子と一致するは、魯詩の佚説を傳へた爲めであらう。其他論衡藝増篇に小雅鶴鳴の詩を引くは荀子儒効篇と合ひ、小雅采芣の服虔注に「平辨治不絶之貌」と言ふは、荀子儒効篇に「治辨之極也」と言ふに一致し、此等論衡の著者たる王充も服虔も皆魯詩を治めたる學者なり。魯詩が殊に荀子と一致する者を舉ぐれば、

荀子。詩曰。憂心悄悄。愠于羣小。小人成羣。斯足憂矣。宥坐篇

劉向封事。詩云。羣臣悄悄。愠于羣小。小人成羣。誠足愠矣。漢書劉向傳

劉向が魯詩を用ひたることは、前に陳べたるが、荀子の宥坐と劉向封事と一致するは、魯詩が荀子に本づくを證すべきである。又た荀子に齊風東方未明の詩を引き、

諸侯召其臣。臣不俟駕。顛倒衣裳而走禮也。詩曰。顛之倒之。自公召之。大略

と言ふは、君が臣を召すときは、臣は衣裳を顛倒して、急遽之に應すべきことを言ひたるに、毛詩は刺詩と爲し、

東方未明刺無節也。朝廷興居無節。號令不時。挈憲氏不能守其職。毛詩齊風東方未明序

と言ひ、君が臣を召すに、時刻節なきを譏つた詩としてあつて、荀子と合はず、趙岐は、

君以其官召之。豈得不顛倒。詩曰。顛之倒之。自公召之。孟子章句

と言つて、荀子と一致してゐる。魯詩は亡びて傳はらざれども、魯詩系統の説から類推すれば、臣が急遽君の召に應ずると解するは魯詩の説である。元來小雅小弁の詩は、毛傳では幽王を刺つた詩にしてあれども、杜欽・楊雄・蔡邕の如き魯詩系統の學者は、皆小弁の詩を伯奇の作と爲してゐる。然らば小弁の詩は魯詩にありては、伯奇の作と爲してあつたと思はる。趙岐も亦た「小弁小雅之篇。伯奇之作也。伯奇仁人。而父虐之。故作小弁之詩」孟子章句十二と言つて、小弁を伯奇の作にしてあれば、趙岐は魯詩系統の學者であることは分明である。魯詩系統の學者たる趙岐が、上文に舉げたる

東方未明の詩を臣が急遽君の召に應ずる詩に引用してあれば、此の説は魯詩の佚説たるに相違あらず、而して荀子の詩説と一致するを觀れば、魯詩が荀子に淵源するは確實である。故に毛詩が荀子に本づけるのみならず、魯詩も亦た荀子に淵源するは、毫も疑を容れない。唯々毛詩も魯詩も全部は一致せず、互に出入あるは免がれない。以上は魯詩の詩説に據りて、荀子との關係を論じたれども、次は魯詩の傳來を略述する。

### 魯詩の傳來

先づ魯詩の學祖たる申公の學統に就いて、之を考ふるに、漢書儒林傳に、

申公魯人也。少與楚元王交。俱事齊人浮丘伯受詩。

とあれば、申公の學は、之を浮丘伯より受けたるを知るべく、又た浮丘伯の學統は、漢書楚元王交の傳には、

少時。嘗與魯穆生・白生・申公。俱受詩於浮丘伯。伯者孫卿門人也。

とあり、又た鹽鐵論毀學篇にも、

昔李斯與包丘子。俱事荀卿。包丘子は即ち浮丘伯なり

とあれば、浮丘伯は荀卿の門人である。是に由りて考ふれば、申公の詩説は、荀卿より浮丘伯を経て申公に至つて、詩傳となり、魯詩の學派を開きたるを知るべし。此の史實に就いて考ふれば、魯詩が荀子に淵源することは固より論はない。申公の世にあつた時代は、史記儒林傳に、

漢高祖過魯。申公以弟子從師。入謁於魯南宮。

とあり、又た楚元王交傳には、

文帝時。聞申公爲詩最精。以爲博士。

とあれば、申公は漢初高祖の時より、文帝の時に及びたるを知るべし。又た毛詩に就いては、毛亨は詩故訓傳を作り、毛萇は之を傳へ、河間獻王の博士と爲る。經典釋文叙録には、

孫卿子傳魯人大毛公。

と言へば、魯詩も毛詩も均しく荀子より出で、其學系は左の如し。

毛詩派 荀卿—大毛公 亨—小毛公 萇

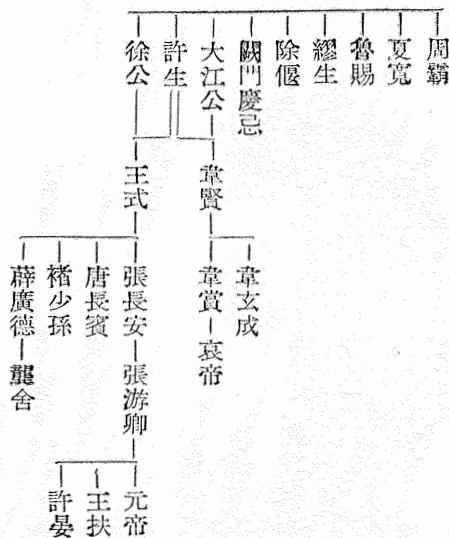
魯詩派 荀卿—浮丘伯—申公

又た韓詩は其傳授の系統は其詳を知る能はされども、韓詩外傳に荀子の語を引く者多きを見れば、其系統は亦た荀子に出づるを知るべし。齊詩は三家中に於て、荀子との關係尤も遠きも、要するに詩の傳授に就いて、其系統を尋ねれば、皆荀子に本づかざる者はあらず。

申公より後の魯詩の傳授は、漢書儒林傳に依れば、申公は詩春秋を以て授け、瑕丘江公及び魯の許生・免中の除生は皆其の學を傳ふ。韋賢は魯國鄒の人なり。其先の孟は楚元王の傳と爲り、孟より五世にして賢に至り、詩を治めて大江公大江公は瑕丘江公なり及び許生に事ふ。詩を以て教授し、號して鄒魯の大儒と稱せらる。子の玄成に傳ふ。玄成及び兄の子賞は詩を以て哀帝に授く。是に由つて魯詩に韋氏の學あり。此の派の學者は多くは魯の人なり。又た別に一派あり、山陽の張長安君字幼は先づ王式に事へ、後ち東平の唐長賓・沛の褚少孫も亦た式に事ふ。張生・唐生・褚生は皆博士と爲る。是に由つて魯詩に張・唐・褚氏の學あり。張生の兄の子游卿詩を以て元帝に授け、其門人瑯瑯の王扶は泗水中尉と爲り、陳留の許晏は博士と爲る。是に由つて張家に許氏の學あり。此の韋氏の學、張唐褚氏の學、及び許氏の學は、漢書儒林傳に載する魯詩の三大派である。

申公—王臧  
—趙綰  
—孔安國—司馬遷





史記前後漢書其他の史書に魯詩を習ふ者の名を載する、無慮二十餘家あり。又其詩說より推して、魯詩の學を爲すことを推知すべき者も、亦十數家あり、以て其學の流行の廣さを知るべし。其尤も著明なる者を舉ぐれば、

司馬遷。劉安。谷永。劉向。杜欽。揚雄。應邵。王充。楊賜。張衡。蔡邕。張迢。王逸。高誘。班固。魯恭。魏應。何休。王符。趙岐。郭璞。

の如きは、其著書或は詩賦文章に引く所の詩は、魯詩を用ひたれば、之に據りて魯詩の面目を髣髴すべし。

### 刺 詩

上記魯詩派に屬する者の著書及び詩賦文章に就き、其中に存する魯詩の遺說を攷へ、魯詩が齊韓毛詩に異なる特色を舉ぐれば、毛詩に謂ふ所の正風正雅も、魯詩にありては、世を諷刺した刺詩と爲す者頗る多し。史記十二諸侯年表

に、

周道缺。詩人本之衽席。關雎作。

と言ひ、又た史記儒林傳叙に、

周室衰。而關雎作。

と言ひ、關雎は周南の始にありて、毛詩に於ては、后妃の徳を頌美したる詩なるに、史記では刺詩と爲してある。史記の詩説は何に本づくかと言ふに、漢書杜欽傳「佩玉晏鳴。關雎歎之。」の臣瓚の注に、

此魯詩也。

とある。臣瓚の注に據れば、關雎を刺詩と爲すは、魯詩の説であることが知られる。臣瓚は即ち傳瓚にして、史記案隱に引く所の穆天子傳目錄に據れば、校書郎と爲り、荀勗と同じく穆天子傳を校定すと云ふ。即ち傳瓚の世に在る時は、西晉の朝に當れり。隋書經籍志に魯詩は西晉の時に亡ぶと言ふ。然らば臣瓚は猶ほ魯詩を見るに及びたるべし。而して杜欽傳「佩玉晏鳴。關雎歎之」の臣瓚注に「此魯詩也」と言へば、關雎を刺詩と爲すは、魯詩説なること確實にして疑なし。且つ魯詩傳授の系統を考ふれば、孔安國は魯詩の學祖たる申公の弟子なり。史記儒林傳に「申公弟子孔安國至臨淮太守。」とあるに據れば、孔安國は古文家なれども、其學風は古今文兼學にして、詩に於ては、申公に従つて魯詩を學び、又た司馬遷は孔安國に従つて、業を問ふたから、司馬遷は申公の再傳弟子なり。故に司馬遷が史記に引く詩は、魯詩を用ひ、關雎を刺詩としたのである。漢人の經を解するは、師傳を尊重し、雜ゆるに他師の説を以てせず、已に司馬遷は關雎を刺詩となせば、司馬遷の詩説は魯詩説たること疑なし。又た類に觸れて之を推し、關雎を刺詩と爲す者及び其詩説より、魯詩を治むることを推定し得べき者を漢儒に求むれば、前に列舉したる司馬遷以下の二十餘家は、皆魯詩の派に屬すべし。

魯詩の派にありて、關雎を刺詩と爲したる義を攷ふるに、劉向列女傳に、

周康王夫人晏出朝。關雎豫見。思得淑女以配君子。

とあり、郝懿行・王念孫は夫人の二字を衍文とし、文選李善注には此の文を引いて夫人の二字がない。王充論衡謝短篇には、「康王とあり、德缺於房、大臣刺晏。故詩作」とあり、晏起を康王に繋けてあるから、之に従つて、夫人の二字は省くべきである。又た王充論衡に

周衰而詩作。蓋康王時也。謝短篇

とある。然らば魯詩は關雎制作の時代を周康王の時となし、康王が朝安眠を貪り、晚く起きたる爲め、詩人が他日政務を荒廢するに至らんことを憂へ、昔の后夫人が鷄鳴には、佩玉を鳴らして、君所を去りたることを思ひて、關雎の詩を作るといふのである。列女傳に「關雎豫見」と言ふは、漢書杜欽傳贊に「庶幾乎關雎之見微」と言ひ、後漢書楊賜傳に「康王一朝晏起。關雎見幾而作。」と言ふと同じである。列女傳に豫見と言ひ、杜欽傳に見微と言ひ、楊賜傳に「見幾」と言ふは、皆詩人が、康王の晏起が他日政務を荒廢するに至る動機とならんことを憂へ、幾微の時に之を見て戒めたるなり。關雎の刺詩たることは、概要以上の如くである。

小雅鹿鳴の詩は、毛詩序に「燕羣臣嘉賓也。」とあつて、饗宴に主人が禮を盡くし歡を極めて嘉賓を待ちたることを稱美した詩なるに、魯詩は鹿鳴を以て刺詩となし、史記十二諸侯年表に

仁義陵遲。鹿鳴刺焉。

とある。司馬遷が關雎の詩を引いて刺詩としたるは、魯詩の説を用ひたとすれば、漢人の經を解するは、師傳を尊重し他師の説を雜へざる學風より推して、司馬遷が鹿鳴を刺詩と爲すも亦た魯詩の説を用ひたのであらう。蔡邕の琴操に鹿鳴者。周大臣之所作也。王道衰。君志傾。留心聲色。內顧妃后。設酒食嘉肴。不能厚養賢者。盡禮極歡。形見於色。大臣昭然獨見。必知賢士幽隱。小人在位。周道陵遲。必自是始。故彈琴以風諫。歌以感之。庶幾可復。歌曰。呦呦鹿鳴。食野之苹。我有嘉賓。鼓瑟吹笙。吹笙鼓簧。承筐是將。人之好我。示我周行。此言禽獸得美甘之食。尙知相呼。傷時在位之人不能。乃援琴以刺之。故曰鹿鳴也。

とある。即ち酒食嘉肴を設けて賢者を養ふ能はず、賢士は隠れ、小人は位にあり、周道の衰ふる是より始まるを知つて、之を刺つたこととなすは、魯詩の説である。臧庸の拜經日記に、「蔡邕琴操言詩。顯與毛異。蓋本魯申公遺說」とある。王符の潜夫論、淮南子詮言訓の高誘注、劉向楚詞七諫の王逸注に鹿鳴を刺詩と爲すは、史記十二諸侯年表及び蔡邕の琴操に同じである。

以上の如く關雎鹿鳴を以て刺詩となせば、此に大なる疑問を生ず。上に引きたる如く、史記十二諸侯年表には、周道缺。詩人本之衽席。關雎作。仁義陵遲。鹿鳴刺焉。

と關雎鹿鳴を全く刺詩と爲したるに拘はらず、孔子世家には、

關雎之亂。以爲風始。鹿鳴爲小雅始。文王爲大雅始。清廟爲頌始。三百五篇。孔子皆弦歌之。以求合韶武雅頌之音。禮樂自此可得而述。以備王道。成六藝。

と言ひ、關雎鹿鳴を頌美の詩となして、十二諸侯年表に譏刺の詩と爲すとは、其意趣全く相反せり。梁玉繩も之に就きて論じて、

漢書儒林傳稱。孔安國爲中公弟子。則安國所受者魯詩。史公從安國問古文尙書。或亦從學魯詩。表言周道缺而關雎作。儒林傳序言周室衰而關雎作。其用魯詩與。然而關雎正風之始也。非變風也。鹿鳴正雅之始也。非變雅也。孔子剛詩。

豈取衰世諷刺之作。以冠風雅哉。且孔子世家。以關雎爲風始。鹿鳴爲小雅始。奈何自相牴牾乎。史記志疑十二諸侯年表

と言ひ、十二諸侯年表と孔子世家とが、同じ司馬遷の手に出でながら、關雎鹿鳴の義を説くに、一は諷刺の詩と爲し、一は頌美の詩と爲し、史記の一書中にあつて、互相牴牾するを疑ふ。是れ第一の疑問なり。陳喬樞も亦た之に就き疑を懷き、

周公制禮作樂。以鹿鳴用之升歌。以關雎用之合樂。具載禮經。三家豈未之前聞。而顧以關雎作於康王。鹿鳴作於衰周乎。魯詩遺說攷

と言ひ、儀禮に據れば、卿飲酒には鹿鳴・四牡・皇皇者華を歌ひ、周南關雎・葛覃・卷耳・召南鵲巢・采芣・采蘋を合樂す。卿射禮及び燕禮には周南關雎を合樂し、堂々たる正式の饗宴に用ふ。此等の事が禮經に載つてゐるのは、三家は之を知るべきに、而るに關雎は康王の時に作られ、鹿鳴は襄周の時に作られたとすべき筈なし。若し關雎鹿鳴を刺詩と爲せば、禮經と牴牾して合はず。是第二の疑問なり。又た魯詩派に屬する服虔は、

自鹿鳴至菁菁者莪。道文武脩小政。定大亂。致太平。樂且有儀。是爲正小雅。毛詩小大雅譜疏引

と言ひ、鹿鳴を正小雅と爲す。若し正小雅ならば、毛詩と同じく頌美の詩なり、然るに魯詩は關雎鹿鳴を刺詩と爲し、魯詩派の經師たる服虔が鹿鳴を正風正雅と爲すと合はず。是れ第三の疑問なり。此等に就いて考ふれば、魯詩にありても、關雎鹿鳴は正風正雅としたことは、之を服虔の説に徴するも明白なり。然るに史記其他の魯詩派が之を刺詩と爲したるに就き、陳喬樞は説を爲して、

韓詩難以關雎爲刺世。而外傳述孔子與子夏論詩。謂關雎爲生民之屬。王道之原。不外乎此。則未嘗不以不爲正始之道也。齊詩雖以魯麗爲思古。而禮家謂笙入間歌。謂魚麗爲太平年豐物多。物多酒旨。所以優賢。則未嘗不以爲頌美之詞也。鹿鳴之爲正小雅。魯詩之説。蓋亦明著其義。所謂忽養賢。而鹿鳴思始。卽誦古刺今者耳。魯詩遺說攷

と言ふ。其意は魯詩も關雎鹿鳴の詩を頌美の詩と爲したるも、其刺詩と言ふは、後の人が古の詩(關雎鹿鳴など)を誦して、今を刺つたのであると。されば刺詩と言ふは、關雎鹿鳴の詩其のものには、諷刺の意なく、後の者が古を慕つて之を歌ひ、今の世を諷刺したるを言ふこととなる。若し刺詩を此の如き意味にすれば、前に引きたる十二諸侯年表に「周道缺。詩人本之衽席。關雎作」と言ひ、又た儒林傳に「周室衰。而關雎作」と言ひ、王充論衡謝短篇に「詩家曰。周衰而詩作。蓋康王時也」と言ふ。此の作の字を字面通り新に關雎の詩を作つたとすれば、關雎の詩は、康王の時に、康王の晏起を刺る爲めに作りたることとなり、關雎鹿鳴を正風正雅となす魯詩の義と岐互して合はず、劉師培は其岐互を通ずる爲めに、作の字に就いて左の説を陳べ、

詩分四家。始於西漢。綜觀序說。誼似互岐。然古人於詩。自作者爲作。諷詠前人之詩。亦爲作。故左傳召穆公糾合宗族作詩。作義同賡。與寺人孟子作爲此詩之作不同也。自作者爲賦。諷詠前人之詩亦爲賦。故左傳記鄭七子賦詩。賦亦同賡。與鄭人爲之賦清人之賦不同也。左傳集

と言ひ、極めて簡にして要を得たり、其意は古人が詩に就いて、自ら詩を作つたことも作と言ひ、又た古人の詩を諷誦することも作と言ふ。賦も亦た同様である。左傳に「召穆公糾合宗族作詩」と言ふは、召穆公が宗族を會合して、古の周公の詩を歌つたことを言つたのであると。即ち劉師培は之を以て、魯詩の「關雎作」或は「周衰而詩作」も康王の時に至り新に關雎の詩を作りたるにあらず、康王の時に古の關雎の詩を歌つて今の世を刺りたることを證したのである。

左傳僖公二十四年孔穎達疏にも杜注に本づき鄭志を引き、左傳の召穆公が宗族を糾合して詩を作すといふ作の字を解して古詩を誦することとし、其考證は極めて詳密である。薛季宣は孔穎達の作の字の解を魯詩の關雎作に應用して矢張り古詩を歌ふ義としたのである。安井息軒も「蓋作奏也。始作詩。固謂之作。奏人所作詩。亦謂之作。論語曰。樂其可知也。始作翕如也。召穆公歌常棣之詩以奏樂。故云作詩」左傳輯釋と、作詩の作を詩を歌つて樂を奏することとしたるは、其解極めて明快なり。作の字を此の如く解すれば、史記十二諸侯年表及び儒林傳の「關雎作」「鹿鳴作」も古詩を歌つたこととなる。關雎鹿鳴は正風正雅にして、頌美の詩なれども、周の衰ふるに至つて、時の人が關雎鹿鳴の古詩を歌つて今を刺る義となり、孔子世家に關雎を風の始と爲し、鹿鳴を雅の始と爲したると、何等の牴牾する所なく、又た服虔が鹿鳴を正小雅とするのにも一致し、些の岐互する所なきこととなる。然し「作詩」を解して古詩を誦すと爲すは、宋の薛季宣が作詩を解して詩を賦すと爲し、

來教謂。詩之作。起於教化之衰。所引康王晏朝。將以爲據。魯詩所道可盡信哉。求詩名於禮經。非後世之作也。又安

知關雎作刺之說。非賦其詩者乎。浪語集答  
何商霖書

と言ふに昉まり、後の今文家は皆此の説に従ひ、之を敷衍したのである。

毛詩の謂ふ所の正小雅にして、魯詩にありては、刺詩たる者は、鹿鳴のみならず、鹿鳴の次の四牡も、王符の潜夫論には、

詩云。王事靡盬。不遑將父。言在古閒暇而得孝養。今迫促不得養也。愛日篇

とある。王符の潜夫論には、鹿鳴を以て刺詩と爲し、司馬遷の史記年表、蔡邕の琴操の如き魯詩派の説と一致するより考ふれば、王符は魯詩派なり。而して四牡を刺詩と爲す、然らば四牡を刺詩と爲すは、魯詩の義である。四牡の次の皇者華は、恐らくは魯詩は前後の篇と同じく、一併に刺詩と爲したる如く思はるゝが、其義は亡びて傳はらず。次の棠棣は、杜鄴傳に

聞人情恩深者其養謹。愛至者其求詳。夫戚而不見殊。孰能無怨。此棠棣角弓之詩所爲作也。

と、棠棣を刺詩にしてある。杜鄴は魯詩派であるから、棠棣を刺詩と爲すは、魯詩の義であらう。次の伐木も、蔡邕の正交論に、

古之交者。其義敦以正。其誓信以固。迨夫周德始衰。頌聲既寢。伐木有鳥鳴之刺。谷風有弃予之怨。其所由來。政之失也。

とあり、又た應邵の風俗通義にも、「伐木有鳥鳴之刺。谷風有弃予之怨。終始以交爲難。況容悅偶合。而能申固其好者哉」と伐木を刺詩にしてある。杜鄴・蔡邕・應劭は魯詩派であるから、伐木を刺詩と爲すは、魯詩の義であらう。然し魯詩派である服虔は、鹿鳴より菁菁者我に至るまでの諸篇を正小雅と爲してあれば、魯詩にありても、四牡・皇者華・伐木は正風正雅にして、頌美の詩と爲したるならん。而して漢書杜鄴傳・蔡邕正交論及び應劭の風俗通に四牡・伐木を刺詩と爲したるは、亦た世を刺る爲めに作りたるにあらずして、後の人が此等の詩を誦して世を諷刺したのであらう。魯詩の説の如くならば、詩其者の本質に美刺の意あるにあらず、同一の詩にして、之を歌ふ者の境遇に依つて、或は怨刺の詩ともなり、或は頌美の詩ともなる。美詩若くは刺詩と言ふは、詩其者の本質に於て、美詩か若くは刺詩であらねばな

らぬ。此點に於て魯詩の説は甚不徹底で、曖昧模稜なるを免れない。

### 魯詩の異義

魯詩は亡びて今は見る能はざれども、魯詩派の言に依りて、魯詩の遺説を窺ふべき者で、著しく毛詩と其義を異にする者を擧ぐれば、

周南葛覃は毛詩序に「葛覃后妃之本也。后妃在父母家。則志在於女功之事。躬儉節用。服澣濯之衣。尊敬師傅。則可以歸安父母。化天下以婦道也」とあつて、后妃の徳を讃歎したる詩と爲したるに、蔡邕の協和婚賦に「葛覃恐其失時。標梅求其庶士」と標有梅と同じく、婦人が嫁するに時を失ふを恐るる詩としてある。

周南采芣は毛詩序に「后妃之美也。天下和平。則婦人樂有子矣」とあるに、列女傳に「夫有惡疾。其母將改嫁之。女不聽其母。乃作采芣」とある。列女傳に謂ふ所は、魯詩の説である。文選辨命論注及び御覽七百四十に引く韓詩の「傷夫有惡疾也」と一致し、魯詩と韓詩は其説同じくして、毛詩とは異れり。

召南采芣は、毛詩序には、「夫人不失職也」とあるに、潛夫論班祿篇には、「背宗族而采芣怨」と言ひ、采芣を怨詩と爲したるは、魯詩の義である。

召南草蟲は、毛詩序には、「大夫妻能以禮自防也」と言ふに、劉向說苑君道篇には、大夫の妻の作となさず、君子が善道を好む詩と爲す。左傳襄二十七年に、魯の七子が趙孟を享し、子展が草蟲を賦したる時に、趙孟が「善哉。民之主也。抑武也。不足當之」と言ひ、又た「子展其後亡者也。在上不忘降」と言ふは、說苑の善道を好むの説と其旨趣相合ふ。是れ魯詩の説である。

召南騶虞は、毛詩の序には、「鶉巢之應也」とあるに、蔡邕の琴操に「騶虞者邵國之女所作也。古者聖王在上。君子在位。役不踰時。不失嘉會。內無怨女。外無曠夫。及周道衰微。禮義廢弛。強凌弱。衆暴寡。萬民騷動。百姓愁苦。君怨於外。女傷於內。內外無主。內迫情性。外逼禮儀。歎傷所讒而不逢時。」と言ひ、刺詩と爲したるは、魯詩の説である。



邶風燕燕の詩は、毛詩の序には、「燕燕衛莊姜送歸妾也」とあるに、列女傳及び禮記坊記鄭注には、定姜の詩にしてあつて、經典釋文には、「此是魯詩」と言つて、鄭玄が燕燕を定姜の詩と爲したのは、魯詩の説に従つたとしてある。陳番樞は、鄭玄の禮記注は、多く齊詩の説を述べてあるから、「釋文魯字疑齊之誤」と言ひ、定姜の詩と爲したのは、齊詩であると主張してゐる。禮記鄭注は齊詩に従ふと言ふは、陳番樞の持説なれども、禮記鄭注は、廣く三家の説を兼ね取り、齊詩に限らざれば、必ずしも字を改むるに及ばざるなり。

邶風日月の詩は、毛詩の序に、「日月傷已也。遭州吁之難。傷已不見答於先君。以至困窮之詩也」とあるに、列女傳には、衛宣姜が太子伋を危くし、子の壽を立てんとしたるを刺つた詩とす。史記衛世家と合ふ。是れ魯詩の説である。

王風黍離は、毛詩の序には「黎離閔宗周也」とあるに、新序節士篇には「衛宣公子壽。閔其兄伋之且見害。作憂思之詩。黍離之詩是也」と言ふ。新序は劉向の著なれば、黍離を衛宣公の太子伋と壽の詩とするは、魯詩の説である。

王風葛藟は、毛詩の序には、「刺平王也。周室道衰。棄其九族焉」とあつて、平王の詩と爲す。此の詩を平王の詩となすには頗る疑義あり。毛詩の序は、王風黍離より中谷有蓷までを平王の詩と爲し、次の兔爰を桓王の詩と爲し、次の葛藟を平王の詩と爲し、時代の順序から言へば、葛藟(平王の詩)の次にあるべき兔爰(桓王の詩)が、反つて葛藟の前にあるが爲めに疑義を生じ、鄭詩譜正義には「兔爰序云桓王。則本在葛藟之下。但簡札換處。失其次耳」と言つて、兔爰は葛藟の下にあるべきを、錯簡より生じたる誤となす。元來葛藟毛詩序の平王は、唐石經・小字本・相臺本は、平王に作り、正義及釋文に依れば、崔靈恩集注本・定本・釋文本は桓王に作る。依つて之を夷考すれば、皇甫謐は「桓王失信。禮義陵遲。男女淫奔。讒僞並作。九族不親。故詩人刺之。今王風自兔爰至大車四篇是也。」と言ひ、兔爰を以て明かに桓王の詩と爲す。皇甫謐は魯詩派であるから、葛藟を桓王の詩と爲すは、魯詩の説なり。崔靈恩本・定本・釋文本に桓王に作るは、皇甫謐の説に従つて改めたのである。阮元校勘記に、「集注・定本・釋文本。皆誤以皇甫謐所改入毛鄭詩」と言ふ。此に依りて考ふれば、毛詩に於ては本と葛藟は兔爰の前にあつて平王の詩となしたるに、後に簡札の順序が亂れ、

兇爰と位置が顛倒したる爲めに、疑義を生したるに過ぎず、桓王之詩と爲すは、魯詩の説なり。

王風大車は、毛詩の序に「刺周大夫也」とあるに、列女傳に「楚伐息破之。虜其君。使守門。將妻其夫人。而納之於宮。夫人乃作詩云云」と、息夫人の詩と爲す。是れ魯詩の説である。黍離大車は、魯詩に従へば、衛息の詩なるに、之を王風に列したるに就いては、陳喬樞は「王風得統諸國。衛息又皆周之同姓。故衛之黍離。息之大車。其詩皆得繫之王也」と言へり。

鄭風褊裳は、呂氏春秋には鄭子產の作となす。蓋し魯詩の説である。

小雅小弁は、毛詩の序に「小弁刺幽王也。太子之傳作焉」とあるが、趙岐の孟子章句に伯奇の詩と爲し、「伯奇仁人。而父虐之。故作小弁之詩」と言ふ。是れ亦た魯詩の説である。

大雅行葦は、列女傳には公劉の詩と爲す。魯詩の説である。

以上は魯詩の説が毛詩の序と異なる者を挙げたが、章句に於て其説の異なる者を挙げれば、鄭玄が詩に箋したるは、主として毛傳を根據にしたのであるが、毛傳以外に衆家の説に従ひ、古今文兼採の形式を取った。後漢書鄭玄傳には鄭玄は張恭祖に従つて、韓詩を受くと記してあれど、其實は齊魯韓三家の學に兼通し、詩の箋に於ては、殊に魯詩を取る者が多い。周南關雎の「窈窕淑女。君子好逑」は、鄭箋には、

怨耦曰仇。言后妃之德和諧。則幽閒處深宮。貞專之善女。能爲君子和好衆妾之怨者。

とある。此の鄭箋は、毛傳に「窈窕幽閒也。淑善。逑匹也。言后妃有關雎之德。是幽閒貞專之善女。宜爲君子之好匹」と言ふとは其義を異にせり。鄭箋に「君子好逑」の逑の字を解して「怨耦曰仇」と言つたのは、恐らくは魯詩には、「君子好仇」と、仇の字に爲つてゐたのであらう。釋文には「本亦作仇」とある。鄭玄は魯詩の本に據つて、「怨耦曰仇」の解を下し、且つ「能爲君子和好衆妾之怨者」と注したのである。列女傳には「詩曰。窈窕淑女。君子好逑。言賢女能爲君子和好衆妾也」とある。列女傳の詩説は、魯詩の義である。而して好逑を解して「能爲君子和好衆妾」と言つて、能く

鄭箋と一致するは、亦鄭箋が魯詩に本づくを知るべきである。魯詩には、好述の述を仇に作つてあつたと思はるるに、列女傳に詩を引き、亦た述に作るは、後人が毛傳本に従つて之を改めたのであらう。陳喬樞の魯詩遺說攷にも、「乃後入轉寫。妄據毛詩改字耳」と言つてゐる。爾雅釋故「仇匹」の郭注に詩を引き、「君子好仇」に作る。爾雅の詩字訓義は皆魯詩なれば、以て仇に作るは魯詩なることを知るべし。臧庸の拜經日記にも、「爾雅章句多魯詩」と言へり。

鄆風牆有茨の「中蔣之言」は、漢書谷永傳に「帝王之意。不窺人閨門之私。聽中蔣之言」の晋灼注に、「魯詩以爲夜也」とある。晋灼は晋の人であるから、或は魯詩を見て、此の言を爲したのであらうから、中蔣を夜と解するは、魯詩の義である。釋文に「韓詩云中蔣中夜」とあるから、魯詩韓詩は一致しる。鄭箋は毛傳に「中蔣内蔣也」と言ふに従ひ、魯詩の義を取らなかつたのである。

大雅皇矣の「密人不恭。敢距大邦。侵阮徂共」は、毛傳には、「國有密須氏。入侵阮遂往侵共」と注し、徂を往と解したるに、鄭箋は

阮也。徂也。共也。三國犯周。而文王伐之。

と言ひ、阮、徂、共を三國の名と爲した。毛詩正義に

張融曰。魯詩之義。以阮徂共皆爲國名。毛詩皇矣疏引

とあれば、鄭箋の説は魯詩に據りたることは明白である。

魯詩は篇の順序も、毛詩に比較すると異なる所あり。小雅節南山之什は、今本には、節南山。正月。十月之交。雨無正。小旻。小宛の順序になつてゐる。毛詩の序には、何れの篇も皆「刺幽王也」とあつて、幽王の詩になつてゐる。然るに

鄭詩譜に

問曰。小雅之臣。何以獨無刺厲王。曰。有焉。十月之交。雨無正。小旻。小宛之詩是也。漢興之初。師移其第耳。亂甚焉。既移文。改其目。義順上下。刺幽王亦過矣。

と言ひ、幽厲と言へば、一對の暴君なるに、幽王を刺つた詩はあれど、厲王の詩なき疑問に對し、鄭玄の答は、十月之交。雨無正。小旻。小宛が即ち厲王を刺る詩であつて、本と此の四篇は、宣王の詩である六月の篇の前にあつたのを、漢の初に經師が篇の順序を移して、幽王の詩である節南山・正月の次に置き、遂に今本の順序になつたと言ふのである。十月之交の序、「十月之交。大夫刺幽王也」の鄭箋に、

當爲刺厲王。作詒訓傳時。移其篇第。因改之耳。

と、此の四篇は、厲王を刺る詩であるべきを、毛亨が篇の順序を變へ、後に移して幽王の詩と爲したのだと言ふ。鄭詩譜に謂ふ所の經師は、毛亨を指したることを明言し、殆ど毛亨が篇の順序を紛更した如く言つてゐる。其四篇が厲王の詩であるべき證として、

節彼刺師尹不平。亂靡有定。此篇譏皇父擅恣。日月告凶。正月惡褒姒滅周。此篇疾豔妻煽方處。又幽王時司徒。乃鄭桓公友。非此篇之所云番也。是以知然。十月之交鄭箋

と言つてゐる。鄭玄の意に謂ふ、節南山は幽王の大帥たる尹氏を刺り、此の十月之交は厲王の時の皇父を刺り、正月は幽王の後褒姒を刺り、此の十月之交は厲王の後たる豔妻を刺れるを以て、節南山正月篇は幽王の詩にして、十月之交は厲王の詩たるは、截然區別あつて混同すべきでない、且つ十月之交には「番維司徒」と言ひ、番氏を司徒としてあれども、幽王の時の司徒は、鄭桓公友であつて、十月之交に謂ふ所の番氏にあらず、益々十月之交は厲王の詩たることは明白である。節南山・正月と十月之交に言ふ所の事實は全く異なり。節南山・正月の二篇は、幽王の時の事實で、十月之交は厲王の時の事實である。周の王位繼承は、厲王宣王幽王の順になつてゐる。十月之交以下の四篇を、厲王の詩とすれば、宣王の詩の前にあるべき筈であるといふ考から、篇の順序を舊に復し、宣王の詩の前に置く説である。

此の鄭玄が十月之交・雨無正・小旻・小宛を厲王の詩とするは魯詩に本づいたのである。何となれば韓詩の篇の順序は毛詩と同じであり、齊詩の順序は、詩の三考を以て之を推すに、亦た毛詩と同じで（齊詩の項参考）、何れも四篇を

幽王の詩と爲すに似たり。唯々魯詩のみが四篇を厲王の詩と爲したのである。且つ十月之交の「豔妻煽方處」の豔妻を、毛傳は「豔妻褒姒」と注して褒姒を指し、幽王の詩と爲したのであるが、鄭箋には、

厲王淫於色。七子皆用。后嬖寵方熾之時。並處位。言妻黨盛。女謁行之甚也。

と言ひ、毛傳の如く、豔妻を幽王の後褒姒と爲さずして、別に一人を指したので、是も魯詩に本づいたのである。漢書谷永傳に

昔褒姒用國。宗周以喪。閼妻驕扇。日以不滅。

と言ひ、豔妻を閼妻に作り、褒姒と閼妻とを對舉してあるからは、褒姒と閼妻とは各々別に一人と爲したことは明瞭である。顏師古は、

閼嬖寵之族也。扇熾也。熾善也。魯詩小雅十月之交篇曰。此日而食。于何不滅。又曰。閼妻煽方處。言厲王無道。內寵熾盛。政化失理。故致災異。日爲之食。爲不善也。漢書谷永傳注

と言ひ、毛詩の豔妻を閼妻に改め、后嬖の族姓と爲し、厲王の後を指すは、谷永の上疏に「閼妻驕扇」漢書谷永傳と言ひ、班婕妤も亦た「哀褒閼之爲郵」といふに一致し、而して谷永も班婕妤も俱に魯詩派なるゆえ、豔妻を閼妻に作り、厲王の後と爲すは、魯詩の説たる疑なく、又顏師古が「魯詩小雅十月之交篇曰云云」を引き、十月之交の篇を厲王の詩としたるは、魯詩曰と魯詩に據つたことを明言してゐる。魯詩は西晉の時に亡び、顏師古は之を見るに及ばざれども、漢魏諸家の舊注に魯詩の説を引ける者に就いて、之を襲用したのであらう。鄭玄は十月之交以下四篇の順序を變へて、宣王の詩の前に置くのは、何れの篇の前に置るかといふに、服虔の説には、小雅鹿鳴以下菁菁者莪に至る十六篇を正小雅としてある。正小雅は頌美の詩にして、十月之交以下四篇の如き刺詩は、變小雅に屬し、此の間に列すべからざるゆえ、菁菁者莪の次、六月の前に置いて、始めて魯詩の面目に復することを得るといふ説である。詩の篇次に就いて、毛詩及び齊魯韓に異同あるは、鄭玄が張逸に答へて、「詩本無文字。後人不能盡得次第。錄者直錄存義而已」詩譜引鄭志と言ひ、

詩は諷誦して口耳相傳へ、竹帛に著はざりしを以て、其間に篇次異同を生じたのである。

昭和八年五月稿

## 附 録

下の一篇は、十餘年前に草したる舊稿にて、久しく篋底に藏せしが、魯詩攷と關係あるを以て、其概要を撮りて以て附録となす。

昭和八年五月記

## 感 生 説

支那古代に於ける天人合一の思想は、哲學的方面と宗教的方面との二方面より觀察することを得べし、書經と詩經との二經典は、支那古代の古文書として、當時の思想を窺ふことを得べきも、書經は天子公卿大夫の如き上流の思想を記述したる者なるがゆえに、天人合一の思想を哲學的に言表はし、皋陶謨に「天叙有典。勅我五典。五惇哉。天秩有禮。自我五禮。有庸哉。同寅協恭。和衷哉。天命有德。五服五章哉。天討有罪。五刑五用哉。政事懋哉懋哉。天聰明。自我民聰明。天明畏。自我民明畏。達于上下。敬哉有土。」と言ふが如きは、道德法制刑賞の本源を天に歸し、董仲舒の謂ふ所の「道之大原出于天」と同一思想なれども、天を理の本體となし、別に天を以て人格ある者とは爲さず、是は上流紳の學問識見ある者の思想を史官が記述の際潤色したる者なり。此等哲學的方面の事は略して、宗教的方面に就いて考ふれば、詩大雅生民に

厥初生民。時維姜嫄。生民如何。克禋克祀。以弗無子。履帝武敏歆。攸介攸止。載震載夙。載生載育。時維后稷。誕彌厥月。先生如達。不坼不副。無害無害。以赫厥靈。上帝不寧。不康禋祀。居然生子。

とあり。是の生民の詩は、姜嫄が后稷を生みたる時の事を叙し、毛傳と鄭箋とは其解を異にし、従つて宗教的思想の上にも大なる差異を生ず。毛傳に云ふ。

去無子求有子。古者必立郊媒焉。玄鳥至之日。以大牢祠于郊禋。天子親往。后妃率九嬪御。乃禮。天子所御。帶以弓

鞬。授以弓矢。于之郊謀之前。

履踐也。帝高辛氏之帝也。武迹。敏疾也。從於帝而見于天。將事齊敏也。歆饗。

と。要するに毛傳の説は、姜嫄が后稷を生む初に當り、誠敬の念を以て、郊謀の神（子を授くる神）を祀り、以て子無きの疾を去る。郊謀に歆祀するの時、其夫の高辛氏の帝が率ゐて與に行き、姜嫄は帝の後に隨ひ、帝の足迹を踐履して事を行ふ、敬して敏疾なり。故に神に歆饗せらる。神は既に其祭を饗けて、愛して之を祐く。是に於て天神の美大する所となり、神祿の依止する所となり、即ち懷任するを得て、則ち震動して身するあり。祭れば則ち祐を蒙り福を獲ること早く、人道を終へて以て之を生み、既に之を生めば、則ち之を長養し、成人に及びて徳あり、舜の擧ぐる所となり、用て百穀を播種し、以て下民を利益す。維れを后稷となす（孔疏大意）と云ふ。然るに鄭箋には、

姜嫄之生后稷如何乎。乃禋祀上帝於郊謀。以祓除其無子之疾。而得其福也。能者言齊肅當神明意也。二王之後。得用天子之禮。

帝上帝也。敏拇也。介左右也。夙之言肅也。祀郊謀之時。時則有大神之迹。姜嫄履之。足不能滿。履其拇指之處。心體歆歆然。所左右。所止佳。如有人道感已者也。於是遂有身。而肅戒不復御。後則生子而養長之。名曰棄。舜臣堯而擧之。是爲后稷。

鄭玄の解は首尾は毛傳と異ならざれども、「履帝武敏歆」の句以下の三句は異なりと爲す。鄭謂ふ郊謀を祀るの時に當り、上帝大神の足迹あり、姜嫄祭に因つて之を見、遂に此の上帝大神の足迹拇指の處を履み、足滿つる能はず、時に即ち心體歆歆然として、もの身の左右にあり、身中に止住する所あるが如く、人道精氣の已を感じる者あるが如し。是に於て震動して身するあり。則ち肅戒して復た御せずと。餘は同じ。（孔疏大意）

以上の如く、生民の詩を毛傳は極て常識的に説きたるに反し、鄭箋は上帝の足迹を履み、其氣に感じて子を生むといふは、是れ即ち感生なり。感生とは上帝の精氣に感動して子を生むを言ふ。一見奇怪なるが如くなれども、支那古代の

天人合一の宗教的思想に於て、一概に妄誕を以て之を斥くべからざるに似たり。

又た詩商頌玄鳥に、

天命玄鳥。降而生商。宅殷土芒芒。

とあり。毛傳に、

春分玄鳥降。湯之先祖。有娥氏女簡狄。配高辛氏帝。帝率與之祈于郊禱。而生契。故本爲天所命。以玄鳥而生焉。

毛傳の意は謂ふ、殷湯の先祖簡狄が春分玄鳥至るの日に於て、高辛氏の帝と郊禱子不授神に祈り、契を生む。本と其天命する所なるを以て、玄鳥至るの時に於て生る（孔疏大意）と、契を以て高辛氏の帝の子と爲したるに、鄭箋は、

天使妃下而生商者。謂妃遺卵。娥氏之女簡狄吞之而生契。爲堯司徒。有功封商。堯知其後將興。又錫其姓焉。自契至湯八遷。始居亳之殷地。而受命。國日以廣大。芒芒然。湯之受命。由契之功。故本其天意。

と云ふ。鄭玄は、天命玄鳥とは、天が妃（燕）をして卵を遺さしめ、娥氏之女簡狄が之を吞みて契を生み、堯の司徒となりて功あり、商に封ぜらる。契より八遷して、始て亳の地に居り、國日に以て廣大なりとの意にて、是れ殷の先祖の契が生るる、其母簡狄が夫なく、燕の遺したる卵を吞み、之に感動して契を生むと爲すは、感生なり。

毛傳の詩を解する極て穩健にして常識に合す。鄭玄が生民の「履武敏歆」や、玄鳥の「天命玄鳥降而生商」を解し、帝王の祖先が生るるは偶然にあらず、婦人が神の氣に感じて子を生むといふ感生帝の思想は、頗る奇怪にして信すべからざるに似たるを以て、清代考證家の如きは、率ね毛傳に従つて、鄭玄の説を取らず、鄭玄を以て妖妄不稽と爲す。然れども鄭玄の説は其獨創にあらずして、根據する所ありしなり。感生の思想を考ふるに、列子天瑞には「思士不妻而感。思女不夫而孕。后稷生乎巨跡。伊尹生乎空桑」とあり。列子は後人の攙入多く、眞偽混淆すれども、天瑞篇は文章古樸にして、列子の自筆にあらざるも、先秦の舊書たるを失はず。而して其の「后稷生乎巨跡」と云ふは、生民の「履帝武敏歆」の鄭玄説と一致す。又た離騷天問には「女岐無合夫。焉取九子」と云ひ、又た「簡狄在臺。曷何宜。玄鳥致貽。女何喜」



と云ひ、又た呂氏春秋音初に、「有娥氏有二佚女。爲之九成之臺。飲食必鼓。帝令燕往視之。鳴若謠。二女愛而爭搏之。覆以玉筐。少選。發而視之。燕遺二卵。北飛遂不反」と云ひ、高誘注に、「帝天也。天令燕降卵於有娥氏。女吞之生契。詩云。天命玄鳥。降生商」と云ふ。此等夫なくして子を生むは、今文説の本づく所にして、玄鳥の鄭玄説と一致す。其事たる固より奇怪にして、事實として信すべからざるも、列子・離騷・呂氏春秋などに、此の傳説を載する以上は、支那の古代に后稷や湯の生誕に就き、一種の神祕的事實あることを信ぜしならん。許慎の五經異義に「詩齊魯韓公羊説。聖人皆無父。感天而生。左氏説聖人皆有父」毛詩生民疏引とあり。之に據れば、詩齊魯韓及び公羊派の如き今文家は感生説を信じ、左氏派の如き古文家は聖人に皆父ありとして、感生説に反對せし如し。故に詩に於ても齊魯韓の今文説は感生説を取り、毛詩の古文説は之に反對せしことは、上に引きたる生民玄鳥の毛傳と鄭箋とを見て、歴歴徴證すべきなり。本と鄭玄は古文家なれども、今文説を兼採し、殊に詩を注するに及びては、毛詩を以て準據となしたれども、今文説を兼採したりしことは、宋王應麟及び清代考證家の間に已に定論あり、鄭玄の駁五經異義の「諸言感生得無父云云」の條、毛詩生民疏に引く張融の説及び生民疏等を考ふれば、鄭玄は父なくして感生する説を信じ、生民玄鳥の詩も此の意を以て解したる如し。然らば鄭玄は生民玄鳥の詩を解す可く今文説を取るに、齊魯韓の中何れの説を用ひたるかといふに、魯詩を取りたる如し。

史記三代世表の後に、

張夫子問褚先生曰。詩言契后稷皆無父而生。今按諸傳記。咸言有父。父皆黃帝子也。得無與詩繆乎。褚先生曰。不然。詩言契生于卵。后稷人迹。欲見其天命精誠之意耳。鬼神不能自成。須人而生。奈何無父而生乎。一言有父。一言無父。信以傳信。疑以傳疑。故兩言之。堯知稷契皆賢人。天之所生。故封之。契七十里。後十餘世。至湯王天下。堯知稷子孫之後王也。故益封之百里。其後世且千歲。至文王而有天下。詩傳曰。湯之先爲契。無父而生。契母與娣妹浴于玄丘水。有燕銜卵墮之。契母得。故含之。誤吞之。卽生契。契生而賢。堯立爲司徒。姓之曰子氏。子者茲。茲益大也。詩

人美而頌之曰。殷社芒芒。天命元鳥。降生商。商者質。殷號也。文王之先爲后稷。稷亦無父而生。后稷母爲姜嫄。出見大人跡。而履踐之。知於身。卽生后稷。姜嫄以爲父。賤而弃之道中。牛羊避不踐也。抱之山中。山者養之。又捐之大澤。鳥覆席食之。姜嫄怪之。於是知其天子。乃取長之。堯知其賢才。立以爲大農。姓之曰姬氏。姬者本也。詩人美而頌之曰。厥初生民。深修益成。而道后稷之始也。

とある。此の中に詩傳を引き、契と后稷の感生の事を載す。詩傳は蓋し魯詩傳を言ふならん。史記孝武本紀集解に張晏の説を引き、「褚先生名少孫。漢博士」と云ひ、又た索隱には「張晏云。褚先生潁川人。仕元成間。章稷云褚顓家傳。

褚少孫梁相褚大弟之孫。宣帝時爲博士。寓居沛。事大儒王式。故號先生。續太史公書。阮孝緒亦爲然」と云ひ、漢書儒林傳には「沛褚少孫事王式爲博士。由是魯詩有褚氏之學」と云ふ。以上の諸説を綜合して考ふれば、褚少孫は魯詩の學者にして、宣帝の時博士と爲り、元成の時に及びたるなり。然らば三代世表後に魯詩學者たる褚少孫が引く所の詩傳は魯詩傳たる確實にして疑なし。而して詩傳に契と后稷の感生を載せ、又列女傳(一)、爾雅釋名、白虎通篇名、王逸楚辭章句、論衡奇怪篇、潛夫論五德篇等の作者は、皆魯詩の學者にして、此の中に契及び后稷の感生の事を載せれば、殷周の祖先が感生なるは、魯詩の説なり。而して鄭玄は生民玄鳥の詩を解し、契と后稷とを感生と爲したれば、鄭玄の感生説は魯詩に本づけるなり。

三代世表後に引く所の詩傳に「湯之先爲契。無父而生」と言ふ。魯詩は無父感生説なること以て見るべし。今文派の感生にも、父なくして、天神の氣に感じて生るといふ無父説と、父あつて天神の氣に感じて生るといふ無父説とあり。褚少孫は、「鬼神不能自成。須人而生。奈何無父而生乎」と云ひ、常識に本づき極めて痛快なれども、原始の感生説は、上に擧げたる如く、列子・離騷・呂氏春秋等、皆夫なくして感生すと爲したるなり。後漢代に至りては、無父感生は極て常理に遠く、有り得べからざる事なるを以て、夫ありて人道は人間にあれども、神は唯氣を興ふと爲す。是れは無父説に比すれば、頗る進歩したる思想なり。史記殷本紀に、「殷契母曰簡狄。有娥氏之女。爲帝嚳次妃。三人行浴。見

玄鳥墮其卵。簡狄取吞之。因孕生契」とあり、又た周本紀に、「姜原爲帝嚳元妃。姜原出野。見巨人蹟。心欣然說欲踐之。踐之而身動。如孕者。居期而生子。以爲不祥。弃之隘巷」とある。孔安國は古文家なれども、詩に於ては申公に従つて魯詩を學び、司馬遷は孔安國に従つて業を問ひたるを以て、司馬遷は申公に於ては、再傳弟子たり。且つ司馬遷の時には、毛傳は未だ出です。故に史記に引く所の詩は、魯詩を用ひたり。此の史記殷本紀及び周本紀に契と后稷との感生を載するは、皆魯詩に本づきたれども、「聖人皆無父。感天而生」の説には従はず、簡狄を帝嚳の次妃と爲し、姜嫄を帝嚳の元妃と爲せば、是れ父あるなり。許慎は其五經異義には「詩齊魯韓春秋公羊說。聖人皆無父。感天而生。左氏說聖人皆有父。謹案。堯典以親九族。卽堯母慶都。感赤龍而生堯。堯安得九族而親之。禮織云。唐五廟。知不感天而生」毛詩生民疏引と云ひ、左氏說の「聖人皆有父」に従ひ、齊魯韓の無父說には斷然反對せり。許慎は古文家なれば、さもあるべく思はるるに、說文解字には、「古之神聖人。母感天而生子。故稱天子」說文解字第十二篇と云ひ、今文家の感生說を取れり。鄭玄は駁五經異義に「諸言感生得無父。有父則不感生。此皆偏見之說也。商頌曰。天命玄鳥。降而生商。謂城簡吞配子生契。是聖人感生。見經之明文。劉媪是漢太上皇之妻。感赤龍而生高祖。是非有父感神而生者也。也與邪通且夫蒲盧之氣。嫗煦桑蟲。成爲巳子。況乎天氣因人之精。就而神之。反不使子賢聖乎。是則然矣。又何多怪」毛詩生民疏引と云ひ、鄭玄は契の感生は父なく、高祖の感生は父ありと爲したるが如し。蓋し契に就いては十分其の信する所の無父說を取りたれども、高祖に至りては、漢の時にありて、高祖の父を無視して、無父說を主張する能はず、有父說に従ひしならん。段玉裁は、

「按此鄭君調停之說。許作異義時。從左氏說。聖人皆有父。造說文則云。神聖之母。感天而生。不言聖人無父。則與鄭說同」と述べた。許慎は古文家なれども、後漢末の古文家は多く今文を兼ね。許慎が感生說を取りたるは今文說を用ひたるなり。段玉裁が許慎は一面は今文に従ひ、感生說なれども、一面は左氏說に従ひ、有父說なりと言ふは、蓋し許慎の意を得るに似たり。唯々鄭玄を許慎と同じく有父說に見たるは當らず、鄭考には鄭玄は純粹に魯詩に従ひ、無父感生說なるは、毛詩生民疏に引ける張融の説を見ても知ることを得べし。鄭玄の漢太上皇云云に至りては、漢代にありては

然か言はざるを得ず、是れ時に應じて變通の道なり。感生帝に就いては、別に鄙稿あり、文長ければ此に具録せず。

〔附記〕

此度漢文學會編輯部の方から、穆堂追悼號を出すに當つて、何か故人の遺稿でも有つたらとの御話で御座いましたので、一日嗣子俊彦と筐中の整理を致しました處、遺稿數篇を發見しました。其の中に、齊魯韓三詩の舊稿が有りました。詩は故人が常に心にかけて乍ら、其の難事なることを口にしつつ終られたもので、遺稿が有つたことはむしろ意外でありますので、追憶旁々、三詩中の魯詩だけを撰んで載せて頂きました。何分未定稿なものですから隨處に整はない點が有りますが、それも其のまゝにさせて貰ひました。一言御斷りまで。

十三年二月二十日

小林 信 明